

工業教育の方向とこれから

栃木県立宇都宮工業高等学校長 池守 滋

1. はじめに

グローバル化、少子高齢化、地方の衰退にはじまり、経済格差から教育格差へ、さらにいじめ問題や青少年の凶悪犯罪がマスコミに大きく取り上げられるなど、我が国の教育環境を取り巻く状況は、大変厳しいものがある。このような状況は、当然、工業高校（工業学科を設置する高校も含む）においても同様であり、むしろ、小学校、中学校と積み重ねてきたものが、高校入学後に問題化したり、逆に積み重ねの不十分な点が顕在化したりして、多くの教員を悩ませている。

さらに、少子化に重ねて普通科志向による専門高校の定員割れや、高校再編による学校・学級減、地域産業の変化（衰退）による出口の確保、大学など上級学校への進学希望者の増加など、時代の変化への対応に追われている。これからの10年、20年は今まで以上に工業高校をはじめとする高等学校は、大変な時代に入ったと感じる。

このような時代を生き抜かなければならない工業高校の先生方へ向け、思うところを述べていきたい。

2. 教育の方向について

東京オリンピックに向け、急激な教育改革が進められている。オリンピックが開催されるから、学校教育も併せて変えよう、ということではないが、オリンピック開催が大きな契機になっていることは確かである。国の大きな流れとして、政策的に教育を見直すことは、悪いことではない。世界の傾向を捉え、これからの方向性を示すという意味で、国が教育の大きな方向を指し示すことは当然である。

それを受けて各都道府県、さらに市町村の教育委員会が地域に沿った方向を示し、やっと学校が実施できる状態になる。このように、末端である学校現場まで浸透するにはなかなか時間がかかり、年単位のことも多い。今の時代では、その伝わる間に、状況が変化してしまうことも多々ある。

遅いことを嘆くのではなく、学校現場（または校長）として、時代の変化、特に学校を取り巻く環境の変化に気づくことが大切であり、設置者（公立学校では教育委員会）との情報交換を行いながら対応策を考える必要がある。まさに、現場の力の発揮どころである。

本来、学校は子どもたちの人格を形成するため、幼児期からいろいろな学力を身につけさせ、その学力を使いこなせるしっかりとした人間を

育てる場所である。従って、学校は子ども一人一人の学習に責任をもたないといけない。しかし、実際問題として、学校が子どもの学習成果として、どの程度の学力を身につけたかをきちんと保証すること、または証明することは難しい。手段の一つとして「テスト」がある。このようなことから国が新しい学力を評価するテストを統一して実施する予定がある。実施のための日程も公開され、実務的な段階に入っている。しかし、工業教育では、単なる「ペーパーテスト」では測ることができない学力もある。実技試験を行えばいいが、実際には全国統一して一斉にやることは、施設設備が不足するので無理であろう。

一方で、テストを実施したら、自分が、学校が、全国的に見てどの程度のレベルであるかが問われる。また、知りたいのが当然である。今では、小学校段階から全国レベルの試験を受験し、全国順位や県内順位、校内順位などを知られることが当たり前の生徒たちが高校生となっている。

新しいテストは、段階別で評価を示すといわれるが、その活用方法は学校サイドに任せられる予定である。受験には、費用もかかるので、これまでの業者テストとの差異、利点がないと、受験に手を挙げる学校が少なくなる可能性がある。さらに、各地の小中学校が文部科学省の全国学力テスト（全国学力・学習状況調査）の結果を公表し始めたように、このような試験の結果を高校が自ら公開することにより、学力の保証の証明とし、かつ学校評価に繋がることになるのではないかと心配である。

3. グローバル化

現在の我が国は、ここ数年を見ても完全失業率はわずか4%以下、所得格差の程度は国際的にも最低レベルであり、国民皆保険を実現し、

世界最大級の輸出国を維持している。しかも、平均寿命も世界最高水準で、乳幼児の死亡率は低く、学力的にも基本的計算力や識字率はトップクラスであり、殺人などの重大犯罪の発生率も低い。さらに、炭素排出量も少ない。このような国は、アメリカ、ヨーロッパにもなく、また中国でも達していない。もちろん、多くの課題もあるが、それでも我が国は、改めてみると世界的にも安全で安心して生活できる数少ない国であることは間違いがない。このような世界にまれに見る国を造り上げたのは、勤勉な国民性と先人たちの努力の賜物である。それを今後とも維持して行くには、教育が重要であり、同時にグローバル化への対応も急がれている。一方では、ある程度の人口も必要である。

先に述べたように教育の課題は多いが、人口、つまり労働人口の減少をどう克服するかも大きな課題であろう。これまでいろいろな政策案が発表されてきたが、ここでは割愛する。

我が国ばかりでなく、全世界的に「グローバル」という言葉が使われ、特に情報通信技術、ITの分野ではグローバル化が著しいことは言うまでもない。情報通信技術の発達によるグローバル化の影響は、経済や産業ばかりでなく、我々の国民生活にまでおよんでいる。さらに、高校段階でなく小学校においても、グローバル化に対応した教育が叫ばれている。

工業高校においても、産業界から「グローバル競争に勝ち抜けるグローバル人材を育成して欲しい」との要望を良く聞く。「経済・産業のグローバル化」に対応するためには、どのような人材が必要なのだろうか。英語をはじめとする外国語を用いて日常的な会話ができる人材なのだろうか。それも必要ではあるが、これからの教育としては「主体的な学び」ができる人材育成こそが必要なのだと思う。よく言われるように、これまでの大量生産・大量消費の産業構造から、少量多品種生産・知識・情報・サービ



海外の高校の校長室

スを中心としてグローバルに展開する時代となった。学校教育も「つめこみ」と言われた「決められたことを決められたとおりに」教育することから、「先の見えない」将来のために、「答えが一つではない」または「正解がない」ことに対応できる教育（主体性の重視）をしていかなくてはならない。これまでにない教育方法もとらなくてはならない。

一方で、グローバル化が進展することにより、ローカルな競争から全世界を相手にした競争となる。そうするとグローバルに戦えない地域は、経済が衰退し、経済の格差が広がることになる（もうすでに広がっている）。このようなリスクを克服するためにも、地域をしっかりと支えられる人材が基本的に必要なのではないか。もちろん中央で国を支え、世界で活躍できる人材も必要であるが、大人数は必要ないであろう。単に熾烈なグローバル競争に打ち勝てる人材のみを育成するのではなく、世界の人たちと多様な価値観を承認し合うことができ、協力し合える人材が必要ではないだろうか。

4. これから（25年前と今）

25年前、皆さんはどうしていただろう。まだ教員になる前、高校生か中学生の方もいるかもしれない。若手の教師として、ばりばり部活動の指導に励んでいた時かもしれない。25年前、平成2年（学校基本調査が平成27年までしか公表されていないので、25年前を平成2年とした）、西暦1990年の頃は、国内ではスーパーファミコンとちびまるこちゃんが大流行し、教育では学習指導要領の改訂により、小中学校での日の丸の掲揚と君が代の斉唱が義務化された年だった。世界では、まだロシアではなくソビエト連邦があり、東ドイツと西ドイツの統一が決まった年だった。まだまだ我が国が元気で、地域によって異なるが、高校入学者もピークか、下り始める頃であった。

高校卒業生の進路状況について学校基本調査から調べてみた。図1（次ページ）の「高校卒業生の進路状況」によると、平成2年には高校卒業生が1,766,917人であったのが、平成27年には1,064,376人と約70万人も減っている。改めてみると、「70万人」という数字の大きさに驚いた。25年間で、これだけ我が国の若者が減少したのだから、いろいろな問題が生じてくるのは頷ける。70万人も若年者の労働人口が減少してしまっただけでは、海外に生産拠点が移っていくのも致し方ないとも言える。若者がいなくなると、町に活気がなくなり、経済の後退は必然である。しかしながら、この25年間に国内の産業や経済は、リーマンショックなどの経済危機を乗り越え、地方の衰退という課題はあるが、国全体として大きく後退してはいない。まだまだ表面化していないだけで、これからの25年に大きく現れるのではないか。

高校卒業生の全体では70万人も減少している一方で、大学進学者は25年間で約4万人増

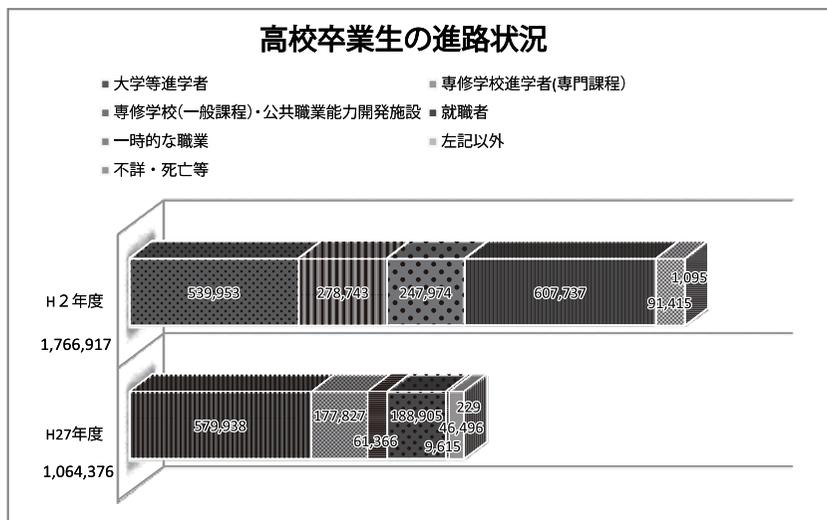


図 1

加している。割合からでは、30.6%から54.5%と平成27年では半分以上が大学へ進学している。専門学校等を合わせると実に高校卒業生の約77%が上級学校へ進学している状況である。高校卒業後にすぐに就職する者は、607,737人から188,905人と約42万人も減少し、全体の17.7%あまりとなった。このため、現在の国や地方の政策が大学進学や大学卒業生を主とすることや、高校の進路指導としては上級学校への進学指導を中心とすることもやむを得ないもの

となった。

また、図2の「工業高校卒業生の進路状況」をみると、卒業生は148,998人から82,217人へと約6万6千人以上減少している。工業高校の生徒数の減少は、少子化に加え、高学歴志向による普通科高校への進学者の増加の影響であろう。また、この25年間に私立の高校が、工業教育から撤退していることは、大変残念なことである。経営的に工業学科が成り立たなくなってきたほどに、中学生からの人気がないのは大き

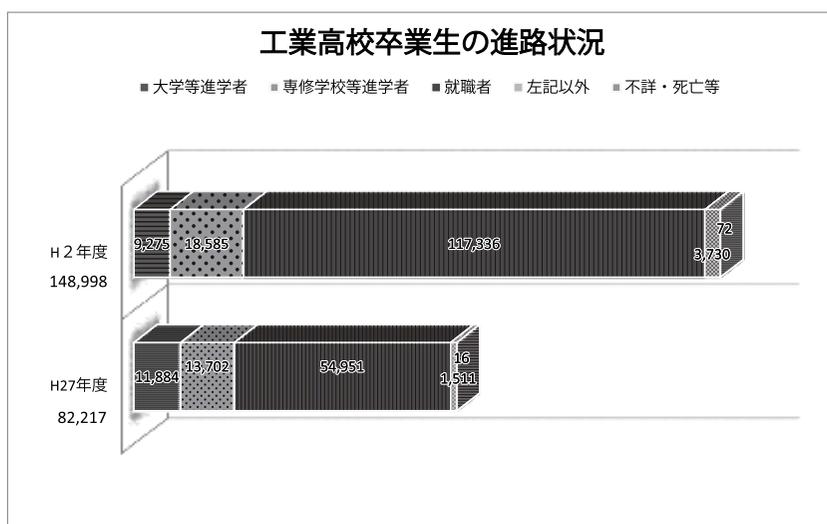


図 2

な問題である。公立学校も、うかうかしてられない。

工業高校卒業者の就職者は、25年間で約6万2千人減少した。生徒数の減少分が、そのまま就職者の減少となっている。工業高校をはじめ農業高校や商業高校などの専門高校は、もともと地域の産業を振興するための人材育成の場として設置されてきた。地域産業が衰退し、人材供給源としての役割が無くなったのではなく、工業のような専門的な教育を受けていなくてもできる仕事が増えたのか(IT技術の向上により、専門的な知識が無くてもできる作業が増えた)、普通科高校の卒業生への期待が高まったのか(工業高校の卒業生が採用できないので、専門知識や技術は採用後に研修するシステムを採用した)、実情を把握する必要がある。今は高校生の採用が好調であるが、いつまた、就職氷河期がやってくるか分からないので、その対策を考える必要もある。

この25年間で、多くの子どもたちが18歳で就職する時代から、進学する時代に変化した。その前、昭和の時代は15歳で就職することが当たり前であった。昭和では、多くの子どもたちが15歳で今後、自分が何をしていくのか、自分の将来を決めた時代だった。昭和から平成に移る時代は、18歳で自分の進路を決める時代になった。今は、大学卒業時、22歳、またはそれより上の年齢で自分の将来の方向を決める時代になった。このような流れに、我々教員の意識がついて行っていないし、対応も後手に回っているようである。もちろん、工業高校を卒業し、18歳でしっかりと自分の将来を考え、就職する生徒がいない訳ではない。そのような生徒こそ、職業教育を主とする工業高校としては、誇るべき生徒である。

現代は、大変不安定で先の見えない時代とも言われる。これから25年先がどうなるかは分からない。分かるのは、統計により我が国の人

口は今後も緩やかに減少していくことである。大都市など一部の地域では、増加するところもあるが、我が国全体としては、工業高校を含む高校の学校数、学級数が増加することも望めない。減っていくことはあっても、増えることはないのである。子どもがいないので、学校がなくなること、学級が減っていくことは仕方が無いことかもしれないが、政策を立てる教育行政サイドは別として、それを学校のある地域や産業界も認めていることは、寂しいことである。

こんな時代に工業高校には、何が求められているのか。また、何をすべきなのか。工業高校は、地域の企業において、将来を担う人材を輩出するところである。時代に逆らうことは、大変難しいことであるが、少しでも元気のある今のうちに、学校現場としてできることは何かを常に考え、地域にPRする、地域の企業と連携することなどやれることをやる必要がある。今後とも、地域の人材を育成し、卒業生がその地域の企業で働き、中核として活躍し、家族を養い、一生をその地域で生活していくようなことが大切であると思う。

5. 青春（最後に）

本稿を読まれる方は、工業高校関係者であるために男性が多いと思われる。女性を除外しているわけではない。私自身も含め『オジサン』と呼ばれる年配者は年を取るとなかなか大変である。

学校（職場）では、それなりに年齢に合わせて、物理的な仕事量が増え、重く、責任があるものになる。また、上と下との間に挟まれる立場に、いつの間にならっている。世の中ばかりでなく、学校社会もなかなか大変である。老化現象なので、だんだん体力的に無理は利かなくなり、気持ちだけはと言っても精神的にも若かった頃のように行かない。

「青春」

サミュエル・ウルマン

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意思、炎ゆる情熱、怯懦^{*}を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが情熱を失う時に精神はしぼむ。苦闘や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精氣のある魂をも芥^{*}に帰せしめてしまう。年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。曰く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰^{*}、事に處する剛毅な挑戦、小児の如く、求め止まぬ探究心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇氣と壯大、そして偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われない。これらの靈感が絶え、悲歎の白雪が人の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至ればこの時こそ人は全くに老いて神の憐みを乞う他はなくなる。

(岡田義夫訳)

* 却ける…しりぞける

* 恰も……あたかも

* 芥……あくた(ちり、ごみ)

* 欽仰……きんぎょう(あおぎょうやまうこと)

左の詩は、第二次世界大戦後の昭和の時代を築いた多くの企業のトップリーダーが、部屋に飾ったり、財布に入れ常に持ち歩いたりしたと言われている。松下電器の松下幸之助氏やソニーの盛田昭夫氏が有名だが、自らの企業を日本の、さらに世界のトップに押し上げようと奔走した、経済大国と言われた時代の人たちには、大変有名な詩である。また、この詩に共感した我が国の経済人たちにより、アメリカのアラバマにウルマン記念館が建てられたほどである。

教育に携わるものとして、若い生徒たちを育てるものとして、教育の「理想」を忘れてはいけないと思う。誰でも若い時(青春)があり、理想に燃えた時期があったのではないだろうか。もちろん、今でも、理想を目指して、日々頑張っている年配の教師もたくさんいる。しかし、長い教師生活から、理想を追うのではなく、現状の追認になっていないだろうか。経験を重ねることにより、仕事を円滑に進めることができるようになるとともに、これからやろうとする仕事の大変さの度合も分かるようになる。言い訳ばかりで、動くことができない、そんな教師になるはずではなかった、と思うことはないだろうか。

後輩である若い教師に任せるものは任せ、明日を支える子どもたちのために、彼らが少しでも理想に近づくことができるよう、経験豊富な皆さんには助言者として後方に控える存在になって欲しいと思う。大切なことは全体を俯瞰して、どうしたら良いかを共に考えてあげることだと思う。

ついつい目の前のことや足元ばかり見てしまいがちな若い教師へのアドバイスを是非お願いしたい。